

成果報告書

1. 事業の題名

「 障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究事業 」

2. 委託事業の実施期間

契約締結日から平成31年3月8日まで

3. 選択した研究テーマ（該当欄に○を記入）

(ア) 学校から社会への移行期

(イ) 生涯の各ライフステージ

4. 実施組織の構成

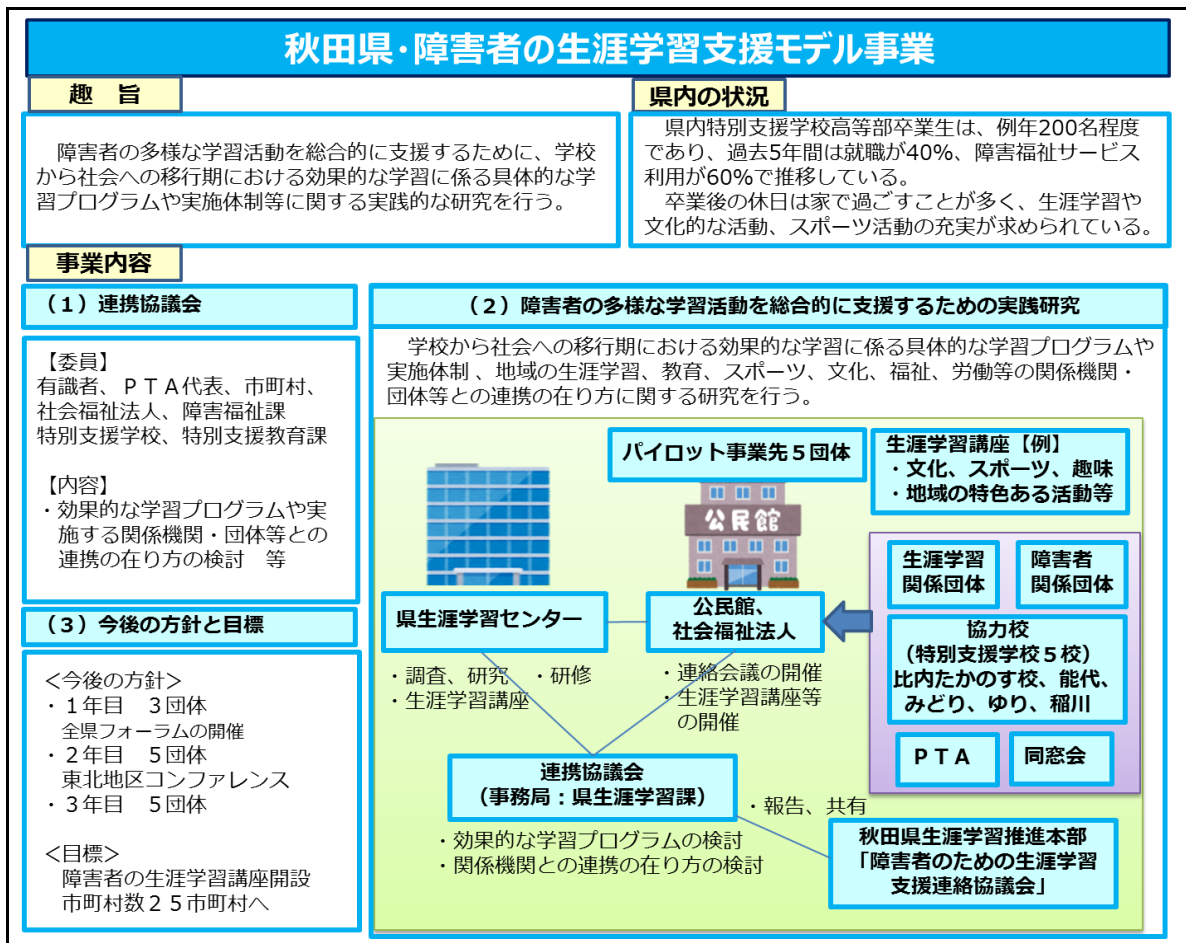
①組織の主要構成員（役員等）

氏名	所属・役職等	備考欄
中山 恭幸	秋田県教育庁生涯学習課 課長	
佐藤 潔	秋田県教育庁生涯学習課 副主幹（兼）班長	
成田 亮子	秋田県教育庁生涯学習課 副主幹	
山田 仁美	秋田県教育庁生涯学習課 主任指導主事	
藤原 秀一	秋田県教育庁生涯学習課 主任社会教育主事	
佐々木達也	秋田県教育庁生涯学習課 社会教育主事	
森川 勝栄	秋田県教育庁生涯学習課 社会教育主事	
櫻庭 直	秋田県教育庁生涯学習課 社会教育主事	
小川 成樹	秋田県教育庁生涯学習課 社会教育主事	

②事業推進担当者

氏名	所属・役職等	備考欄
小川 成樹	秋田県教育庁生涯学習課 社会教育主事	
藤原 秀一	秋田県教育庁生涯学習課 主任社会教育主事	

5. 事業の実施に係る全体像



6. 事業の実施結果

(1) 効果的な学習プログラムの開発

①開発の実施経過

	秋田県	再委託先①	再委託先②	再委託先③
4月				
5月				
6月				
7月	県連携協議会①			
8月		連絡会議①	連絡会議①	
9月		連絡会議②		連絡会議①
10月	県連携協議会②	連絡会議③		
11月				
12月				
1月	障害者のための 生涯学習支援連絡協議会①	連絡会議④	連絡会議②	
2月	県連携協議会③		連絡会議③	連絡会議②
3月				

②具体的な内容

【秋田県】

- ・今年度、秋田県では特別支援学校3校の協力の下、北秋田市障害者生活支援センターささえ、能代市中央公民館、潟上天王つくし苑の3団体に再委託して、障害者の生涯学習支援モデル事業に取り組んだ。
- ・県（事務局）は、本事業に係る連携協議会を年3回開催した。県障害福祉課や県特別支援教育課と連携し、「特別支援学校高等部等の学習指導要領」や「秋田県障害者への理解の促進及び差別の解消の推進に関する条例」などの趣旨を踏まえながら、効果的な学習プログラムの開発や連携体制について協議等を行った。
- ・県特別支援学校PTA連合会からの要望等を踏まえ、卒業後の学びの場、文化的活動やスポーツ活動の充実を目指し、地域の実情に応じながら、各再委託先で講座等を開催した。
- ・講座の内容は、障害者のみを対象とした講座の他、障害の有無にかかわらず誰でも参加できる講座及び障害者が地域の人と交流を深められるような講座とした。今年度実施してみて、講座等の対象者は、主に特別支援学校を卒業した障害者と特別支援学校高等部生徒の移行期における障害者としたが、早期からの社会教育施設利用を促進するために、希望があれば小中学部の児童生徒の参加も受け入れていきたい。また、対象とする障害種は主に知的障害とするが、身体障害や精神障害についても可能な限り参加を受け入れる予定である。
- ・講座等の企画・運営に当たっては、特別支援学校のPTAや同窓会、障害者関係団体にも協力してもらいながら進めた。特に、特別支援学校の保護者に対しては、事務局や再委託先事業所が新年度初めの全校PTAの際に本事業について説明し、周知を図る必要がある。

【再委託先① 北秋田市】

- ・北秋田市の北秋田市障害者生活支援センターささえでは、社会福祉法人と行政の連携による障害者向けの生涯学習講座等の開催や、市内の地域イベント等において障害者と健常者が交流するカフェを実施して、障害理解の促進と地域の活性化を図った。地域の特別支援学校で実施されている絆カフェともコラボし、移行期の接続等を円滑に行えるようにした。今年度は、東京都国立市公民館の「喫茶わいがや」と交流や研修を行った。契約した7月から実施に至る。事業の方向性を長年の当事者の夢だった“Café の出店”とし当センター利用者を対象に Café の出店を目標に活動をスタートした。個々の将来的な自己実現に向けた就労を見据えながらの活動、また当センターと同じく Café 活動を行っている市内の特別支援学校との連携を図り、学校卒業後の生徒が一般就労の前段で、在校中に培った経験を活かしながら当センターで社会性を身につけるための活動としても位置づけた。
- ・はじめての Café 出店の準備を進めるため、情報収集の一環として県内のアビリンピックの視察や、日本で初めて公的機関に出店した障害者の方が働く喫茶わいがや（国立市）を視察した。その後は、外部からの講師をお招きしてコーヒーの淹れ方や接客についての知識習得のため講座を開催。並行して、当事者の経験値を高めるための Café 活動を、市内外で行われる行事に出店という形で実施した。比内支援学校たかのす校でもカフェ活動に取り組んでおり、11月に行われた公開研究会に参加させていただいた。カフェ実践までの目標設定から準備、実践後のふりかえりを次に生かすという PDCA サイクルを使った学

びの提供方法を実践していることを学び取ることができ、ささえ Café でも早速実践しているところである。12 月には、生涯学習フェスタで、隣接して店舗を構え、お互いに接客方法やコーヒーの味等について学び合った。

- ・活動後のふりかえりを丁寧に行い、反省点をまとめた上で、次回に生きるよう促しをした。活動のスタイルが確立していくにつれ、準備から販売までの流れも当事者間でも把握できるようになった。出店の回数が増えたことで、当事者の活動を支えるボランティアのニーズが今まで以上に高まり、市民向けに協力を求める研修会を開催した。

Café をオープンするために必要な知識の習得や出店するための制作、販売を通じ、当事者の経験値が高まり、日常生活でも活かせるようになってきたが、周知度が高まるにつれ活動をサポートする人材の確保が急務となってきている。今後はその点をふまえ、計画に反映させながら事業を継続していきたい。また、Café 活動以外の余暇支援（講座や教室開催）についても、できるだけ地域にある社会資源を活用する観点から、自治会や総合支援協議会、その他行政機関、社会福祉法人と連携しての活動として展開していく予定である。

【再委託先② 能代市】

- ・能代市の能代市中央公民館では、地域の人材や資源を活用して、料理教室や障害者スポーツなどの講座を開催した。また、著名な講師等に講演を依頼し、市民や関係者が、障害理解や共生社会についての理解を深める機会を提供した。

① 9 / 15 14:00~15:00 音楽遊び交流会

内容 音楽療法士によるリズム楽器を使用して音楽療法体験

講師 平川真実

ボランティア なし

参加者 知的障害児・者及び保護者13名 協力団体関係者6名 公民館職員2名

結果 楽器を使用する体験は、参加者が気軽に体験できることと、親子のふれあい体験もでき、笑顔あふれる体験が体感できている

② 9 / 29 14:00~16:00 ユニカール交流会

内容 ユニカールを体験してチームワークを実感

講師 能代市ユニカール協会 7名

ボランティア なし

参加者 知的障害・肢体不自由児・者及び保護者10名 公民館職員1名

結果 親子やチームの協力を得ながら、肢体不自由者とも一緒にゲーム体験をすることで、コミュニケーションづくりにつながった。

③ 10 / 20 10:00~13:00 みんなで楽しくクッキング

内容 風邪予防の食事づくりを体験

講師 藤田睦子

ボランティア なし

参加者 知的障害児・者及び保護者12名 協力団体職員6名 公民館職員2名

結果 料理体験は、障害者への手厚いサポートにより楽しく、安全に行うことができた。また、食材を使った栄養講話はとても分かり易い内容であった。

④ 11 / 10 14:00~15:00 クリスマスリースづくり

内容 クリスマスリース手づくり体験

講師 菅原正二

ボランティア なし

参加者 知的障害・肢体不自由児・者及び保護者12名 協力団体職員4名
公民館職員1名

結果 親子や支援者の協力を得ながらリースを完成させることにより、障害者が創作の楽しさを学ぶよい機会となった。

⑤11/24 14:00~15:00 スマートフォンの正しい使い方

内容 携帯安全教室

講師 渡部正幸 ドコモショップ能代店長

ボランティア なし

参加者 知的障害児・者9名 協力団体職員2名 公民館職員1名

結果 身に覚えのないメール、ラインに対する返信等、よくあるトラブル防止対策について説明を受け、対面しないことに潜む危険性について学ぶことができた。

⑥1/19 14:00~16:00 だいじなお金の使い方・守り方

内容 お金を守る教室

講師 社会福祉士 江國泰介

ボランティア なし

参加者 知的障害児・者及び保護者8名 協力団体職員10人 関係公民館職員1名

結果 お金のトラブルには障害者も巻き込まれている旨の説明を受け、ロールプレイゲームでの体験により、トラブル防止について学ぶことができた。

⑦1/26 14:00~16:00 ロウソクづくり

内容 まち灯りイベントで使用するロウソクづくり

講師 能登祐子、平山はるみ（のしろまち灯り実行委員会）

ボランティア なし

参加者 知的障害・肢体不自由児・者及び保護者9名 協力団体職員1名 公民館職員1名

結果 親子や参加者の協力を得ながら、のしろまち灯りイベントで使用するローソクづくりを体験した。

⑧2/2 15:00~17:00 ロウソク飾り付け

内容 まち灯りイベントの飾り付け

講師 能登祐子、平山はるみ（のしろまち灯り実行委員会）

ボランティア 4名

参加者 知的障害児・者及び保護者3名 協力団体職員1名 公民館職員1名

結果 前回講座で作成したローソクをまち灯りイベントで使用するための飾り付けを高校生ボランティアと行い、その後点灯式にも参加した。

⑨2/9 14:00~15:45 バレンタインケーキづくり

内容 季節イベントのバレンタインデー前にケーキづくりを体験

講師 三浦浩文他2名（障害者就業・生活支援センター）

ボランティア なし

参加者 知的障害児・者及び保護者、一般参加者計14名 公民館職員1名

結果 センターの講師による説明を受けた後、一緒にケーキづくりを行った。レシピを見たり、みんなで相談しあったりしながら、助け合っでデコレーションケーキをつくり、皆で試食も行った。

⑩ 2 / 1 6 14:00~16:00 手話で日常会話

内容 手話で簡単な日常会話を学ぶ講座

講師 佐々木忠之（聾啞者）、見上翔太（読み取り手話通訳）

ボランティア なし

参加者 知的障害者及び一般参加者5名 協力団体職員1名 公民館職員1名

結果 表情を伴う手話が、より相手に伝わりやすいことを学んだ。知的障害者も健常者も手話動作は同じなので、一緒に学ぶことでお互いに教え合うことができた。

⑪ 1 2 / 2 3 14:00~15:30 公開講演会

内容 新しい障がい理解とこれからの共生社会を考える

講師 上野一彦（東京学芸大学名誉教授）

ボランティア なし

参加者 100名

結果 人が成長する環境で一番大切なのは「教育」であり、その人に合った環境に身を置くことによって障害を強みに変え、重さを改善できるなど、共生社会に必要な考えを学ぶことができた。

【再委託先③ 潟上市】

・潟上市の潟上天王つくし苑では、潟上市在住の障害者だけでなく、他の市町村から潟上市に通っている障害者も対象として講座等を開催した。今年度の活動を通して、高校生ボランティアの関わりについては定着してきた。来年度も特別支援学校とも連携を図りながら事前研修や事後研修等を行い、同世代交流を促進していく予定である。

① オープンカフェ（初顔合わせ）10月

初顔合わせのカフェで、参加者人数は11名。学生ボラ10名・支援職員は6名。コミュニケーションをとる為、ゲームや歌を取り入れた同世代の交流を考えた。参加者は、同世代のボランティアに声を掛けることを楽しみ、ボランティアの学生側も良い関わりがもてた。ひきこもりの方1名の参加もあった。

② 運動（ボッチャ&卓球バレー）11月

運動であるということもあり、参加率がよかった。パラリンピックの競技でもあるボッチャを行った。ルールが存在する競技を苦手とする知的の参加者にとっても、周りのボランティアに支えられて、とても楽しんでいる様子が見られた。外部講師は居ないが、支援職員で盛り上げ、2時間では足りない状況であった。

③ mas cake を作ろう！ 12月

Xmas cake をつくった。今回、参加者が自らフルーツをカットし、スポンジにクリームを塗り重ね、「つくる」という一つの作業を共同で分業し仕上げることができた。学生ボランティアや支援職員の手が必要な活動にもかかわらず、参加者の「やりたい」気持ちが全面に溢れ、ほとんど参加者だけで仕上げることができた。

④ 交流餅つき会 1月

今回の餅つきには、初めて地域の民生委員9人参加。しかし、民生委員の関わりが大きく、参加者の「できること」を軽視してしまったのではないかという意見があった。参加者が「いきいきと自分らしく」自己表現するためには、ボランティアや支援職員の数についても考えていく必要がある。

⑤ ダンス&ダンス 2月

ダンスは自己表現であるため、参加者の「想い」が表現できるように、曲の選定にも工夫を凝らした。「花は咲く」「ソーラン節」等、馴染みのある曲で、参加者は楽しく踊ることができていた。ただ、「恥ずかしい」気持ちが全面に出ていた参加者もあり、その気持ちが、表現に歯止めをかけているようにも感じられた。状況に応じて、職員の介入の場面を増やしていく必要がある。

(2) 連携協議会の開催及び効果的な実施体制や関係機関・団体等との連携モデルの構築

①連絡会議の構成員

氏名	所属・役職等	備考欄
藤井 慶博	秋田大学教育文化学部教授	
牧野 真悟	ウェルビューいずみ就業・生活支援センターセンター長	
高橋 精一	秋田県手をつなぐ育成会会長	
斎藤 雅和	社会福祉法人秋田育明会竹生寮相談支援専門員	
田中 弘子	秋田県特別支援学校PTA連合会会長	
疋田 牧男	社会福祉法人県北報公会理事長	
小林 純	能代市中央公民館館長	
佐藤 千枝子	社会福祉法人南秋福祉会潟上天王つくし苑施設長	
石上 和彦	北秋田市健康福祉部課長	
田口 俊成	能代市教育委員会生涯学習・スポーツ振興課課長	
鈴木 健二	潟上市教育委員会文化スポーツ課課長	
佐藤 正好	秋田県立比内支援学校校長	
佐藤 淳	秋田県立能代支援学校校長	
鎌田 裕之	秋田県立支援学校天王みどり学園校長	
高橋 直樹	秋田県健康福祉部障害福祉課課長	
小林 司	秋田県教育庁特別支援教育課課長	

②連絡会議事務局構成員

氏名	所属・役職等	備考欄
小川 成樹	秋田県教育庁生涯学習課 社会教育主事	
藤原 秀一	秋田県教育庁生涯学習課 主任社会教育主事	

③連携協議会の開催及び効果的な実施体制・連携モデルの構築の実施経過

①開発の実施経過

	秋田県	再委託先①	再委託先②	再委託先③
4月	県連携協議会①	連絡会議① 連絡会議② 連絡会議③	連絡会議①	連絡会議①
5月				
6月				
7月				
8月				
9月				
10月				
11月				

12月				
1月	障害者のための 生涯学習支援連絡協議会①	連絡会議④	連絡会議② 連絡会議③	
2月	県連携協議会③			連絡会議②
3月				

④具体的な研究内容

【秋田県】

- ・有識者（大学教授）、手をつなぐ育成会、特別支援学校PTA連合会、就業・生活支援センター、相談支援事業所、再委託先関係者、市町村生涯学習担当課、県障害福祉課、県特別支援教育課、県立特別支援学校（3校）、生涯学習センター職員等を集めた連携協議会を開催した。手をつなぐ育成会からは障害者の現状と課題、特別支援学校PTA連合会から保護者としての要望、就業・生活支援センターからは一般企業へ就労している障害者の現状等について紹介してもらい、多角的な視点での協議ができるように連携協議会を実施した。
- ・秋田県生涯学習推進本部に設置している「障害者のための生涯学習支援連絡協議会」と連携し、本事業の成果や課題を報告・共有する予定である。
- ・本事業を行う上では、部局横断した庁内連携組織が必要であるため、県障害福祉課や県特別支援教育課と連携を密にして、県から市町村及び特別支援学校へと本事業の啓発・普及を図っていききたい。
- ・連携協議会において、先進地視察で得た情報等を共有したり、再委託先の取組等を情報交換したりしながら、効果的な学習プログラムや実施体制について検討した。

【再委託先① 北秋田市】

障害者生活支援センターでは、センター開所当初から、一法人だけでなく、行政や他事業所、民生委員、地域住民、手をつなぐ育成会などと共に活動することで障害理解の促進を図ってきた。その結果、街中で顔を合わせると、障害のある方から積極的に挨拶をしたり、障害者の方を地域活動に誘ったりする関係が築かれ、生活が豊かになったと感じている。

10年たった今、今年度から取り組もうと計画していたことは、上述している関係機関と一緒に活動していくことである。自分たちが主体となって活動を共にする中で、絆が生まれ、障害の有無にかかわらず、当たり前前に社会活動に参加できるのではないかという観点からの計画である。今回の事業は、共生社会を目指すという観点で、障害者の生涯学習を考えたものであるため、連絡協議会メンバーは、市内社会福祉法人出身の有識者、行政、特別支援学校、就業・生活支援センターの関係者とした。連絡会議の内容については、講座、研修会、視察研修計画についての協議や実施報告などを中心に共通理解が図られた。

連絡会議では、毎回ささえCaféのコーヒー提供があり、回数を重ねるごとにCafé店員の表情の変化や、Café活動に対する姿勢、積極性などの成長の様子を見ることができたことが、協議会構成員の心を動かした。また、会議に参加した当事者の生の声を、会議内容の具体化や実践に反映させることができた。今後、当事者の保護者や当事者団体、高校生や大学生に構成メンバーとしての協力を得たいと考えている。来年度は教育委員会と連携を図りながら、この課題解決に向けて取り組んでいく。

【再委託先② 能代市】

障害者の生涯教育を実践する際には、協力者を求めなければ継続実施をすることが困難である。そのため、能代市中央公民館としては、地域の福祉施設及び支援学校と連携を図り、講座の内容、実施時期、実施方法を協議した後に開催している。例えば、講座の開催に当たっては、障害児・者への周知方法、講座内容、進め方等を連絡会議のメンバーと協議を行い実施した。

- ・周知方法 支援学校同窓会及び在学生へのチラシ配布、「広報のしろ」及び地元新聞での周知、就労支援センター登録者へのチラシ案内送付
- ・講座内容 音楽療法講座等、参加しやすい体験型講座を開催
- ・進め方 講師と参加者が近い関係となるよう、ゆったりとしたリズムを刻む楽器を使用したリズム音楽を体感させる内容とした。

講座修了後には、進め方及び内容について参加者及び保護者に口頭で聞き取りを行い、その改善点を次回以降にフィードバックすることで、講座参加者の満足度を高める見直しを行った。

- 改善点
- ・参加者の満足度を上げるため、バリアフリーが少しでも施されている施設で講座を開催
 - ・アンケートの要望に答える形で、体験型の講座を開催

【再委託先 潟上市】

今年度、潟上市は、手探り状態でのスタートであった。第1回目の会議と2回目の報告会で話し合われた内容は以下のとおりである。

～1回目～

- ・障害がある方の参加は少数(20名ほど)であったが、重度者に来てもらうための方策を講じる必要がある。
- ・送迎の対応については今後検討していく必要がある。
- ・3か所の公民館を使用する講座内容であるが、絞り込んで実施した方がよいのではないか。
- ・今後、どのような連携を取り合っ活動を広げていくのかの検討が必要ある。
- ・支援学校との連携体制の構築について検討が必要である。

～2回目～

- ・半年で少しずつ形になってきたようで、本事業の意義が感じられる。
- ・市としても協力していくので、連携を図って進めていければよいと考えている。
- ・社会福祉協議会も協力するが、具体的に何をしたらよいのかを知りたい。
- ・公民館としても協力するので相談してほしい。
- ・支援学校として、PTA等の場を活用し、PRしてみてもどうか。周知する方法を検討すべきと考える。

(3) コーディネーター・指導者の配置やボランティアの活用方策等の開発

① コーディネーター・指導者

氏名	所属・役職等	備考欄
小川 成樹	秋田県教育庁生涯学習課社会教育主事	
藤原 秀一	秋田県教育庁生涯学習課主任社会教育主事	

②開発の実施経過

	秋田県	再委託先①	再委託先②	再委託先③
4月	県連携協議会①	連絡会議① 連絡会議② 連絡会議③	連絡会議①	連絡会議①
5月				
6月				
7月				
8月	県連携協議会②	連絡会議④	連絡会議② 連絡会議③	連絡会議②
9月				
10月				
11月	障害者のための 生涯学習支援連絡協議会①	連絡会議④	連絡会議② 連絡会議③	連絡会議②
12月				
1月				
2月	県連携協議会③			
3月				

③具体的な内容

【秋田県】

- ・コーディネーターが再委託先の講座等に出向き、必要に応じて障害者への支援の在り方について、特別支援学校教員と検討した。
- ・コーディネーターが、地域で行われている自立支援協議会に試行的にオブザーバーとして参加させてもらい、本事業について周知を図ったり、本事業への協力を仰いだりした。また、地域の自立支援協議会において各地域の障害者の生涯学習に関する現状と課題を把握し、各市町村の生涯学習担当者や社会教育主事へ情報を提供した。
- ・生涯学習センターには、来年度、障害者をもつ保護者等へのアンケート調査等を実施して調査研究を行うよう依頼した。調査結果を基に、社会教育・生涯学習関係職員を対象とした「障害者の生涯学習」に関する研修会を実施する予定である。コーディネーター（県事務局）や生涯学習センター社会教育主事が協力し、市町村からの相談に応じたり助言したりすることを試行する準備を進めている。

【再委託先① 北秋田市】

7月、視察研修では連絡協議会構成員に同行していただき、当事者と共通理解を図ると同時に、行動を共にすることで、当事者理解に努めた。

8月、11月、2月の「チャレンジ！！きたっこ」は、障害をもつ子と保護者の長期休暇支援でイベントを行っているが、自分たちがボランティアをするという立場で参加し、そこに参加している中学生、高校生、大学生と共に活動した。当事者が若者世代と協力して一つの活動に取り組むことで、当事者自身のコミュニケーション能力の向上につながり、若者世代の障害理解促進にもつなげることができた。どのような相手に対しても、当たり前に関わることができることを学ぶよい時間となった。この活動は、今後も継続して行い、障害の有無にかかわらず協力してイベントを企画・運営していくことを目標に進めていきたい。

9月 フローラルフェスタでは、他事業所で作ったパンを店頭販売し、繋がりをつくることができた。

10月 元気な高齢者の生涯学習の一環と位置づけられている「Gちゃんサミット」であるが、今回は、障害理解を図り、共生社会を目指すというテーマの下で企画に参画し、自分たちの活動への理解促進を図った。ここでつながった自治体と、来年度はそば打ち体験活動、コーヒーサロンの共同企画に取り組む計画をしている。

10月 ミュージック・ケア体験セミナーでは、外部講師に依頼する形で企画し、地域住民と音楽を通じて交流を深めた。コーヒーの淹れ方講座、接客マナー講座では、実践経験のある講師の下で、学びを深めるための講座をコーディネートした。

12月 生涯学習フェスタには、開始当初から、支援センターささえの交流事業として参加し、防災クッキングなどの周知活動を中心に取り組んできた。今年度は、比内支援学校たかのす校の絆カフェと店舗を並べ、接客や味等についての学びあいを深めることを目的に企画をコーディネートした。

2月 からくりCaféは、連絡協議会構成員のみならず、市内各事業所職員や高校、大学、民生委員などにも呼び掛け、実行委員会を設けた。支援センター単独で実施するのではなく、地域全体で取り組んでいく課題であることを伝え、福祉に携わる人材育成を図る目的の下、コーディネートした。当日は文部科学省からの情報提供をいただき、本事業を地域住民に理解してもらうことに努めた。また、姉妹都市である国立市の取組を実践している方も交えたパネルディスカッション、参加者全員が主役となれるグループワークを行い、和やかな雰囲気の中で余暇支援のために必要なことについて学び合う場をコーディネートした。また、グラフィック・レコーディングの技術で、視覚的に会の内容を振り返ることができた。この技術は、北秋田市として初めて取り入れた手法で、参加者の反響は大きかった。

課題としては、次の2点が挙げられる。

- ・学生や障害福祉事業所の方々に、一緒に取り組みたいと感じてもらうためにはどのような取組が必要かを考えた上で実践する必要があること。
- ・共に活動したいと思っても情報が届かないという意見も多く、広報の仕方を研究する必要があること。

【再委託先② 能代市】

社会教育主事有資格者であるコーディネーターの佐藤邦彦がその専門性を活かし、講座内容の決定、講師選定を行い、事業を展開した。

社会教育施設勤務14年の経験による、豊富な講座企画能力を発揮し、地域住民への周知、障害者への呼び掛けなどについても、工夫を凝らしながら講座を開催した。

【再委託先③ 潟上市】

(高校生ボランティアについて)

- ・高等部卒業後、障害者が地域における社会活動への参加を目指すことから、同世代の高校生にボランティアとして参加してもらった。偏見や差別を少しでも無くし、「障害の理解」につなげてもらいたいとの思いからである。初の取組であることから、3校の高校に出向き説明を行った。学校や生徒たちからは、ボランティアの活動をよいチャンスと捉えてもらい、協力を得ることができた。
- ・実際の活動の前に、支援学校主催の「ボランティア養成講座」等で、障害のある方への接

し方や関わり方の指導を行った。

事業を推進する中で見えてきた点は以下のとおりである。

～良い点～

- ① 同世代の関わりのため、参加者(障害者の方)が自ら声を掛けるなど、和やかな雰囲気になった。
- ② 参加者が主体的に関わろうという姿が見られた。
- ③ 高校生ボランティアがその活動を通して、障害があってもできることがたくさんあるのだという認識を深めることができた。
- ④ 将来、福祉の道に進みたいと、進路につなげようとする高校生の姿が見られた。。
- ⑤ 高校生から、継続して参加したい旨を表明する声が挙がった。

～改善点～

- ① 毎回、現地までの交通手段を確保する必要がある。
- ② 高校のテスト期間においても、高校生にボランティアとして参加してもらう道を探っていく必要がある。
- ③ 「ボランティア養成講座」で得た知見を生かすことができるボランティアの場を確保する必要がある。
- ④ ボランティア募集の周知不足の為、未だ認知度が低い。効果的な広報について考えていきたい。

以上のことから、次年度の改善点を次のようにまとめた。

- ① 学生ボランティア募集についての周知徹底 (高校生・大学生・社会人・地域住民等)
- ② 「障害理解」についてのサポート体制の強化
- ③ 開催場所の検討(活動場所)
- ④ 社協・市との連携

その他、次年度の目標としては次の3点が挙げられる。

- ① 支援者の登録人数を増やし、準備にかかる時間の短縮を考えたい。
- ② 生涯学習として、多様な取組に応じることができる指導者の確保(例:手芸・料理・等)
- ③ 障害がある方との関わり方の具体について学ぶ場所と時間を確保したい。

(4) 成果等の普及

①実施経過

	秋田県	再委託先①	再委託先②	再委託先③
4月				
5月				
6月				
7月				
8月		国立市視察研修市長報告		

9月				
10月		Café 出店と発表 (Gちゃんサミット)		Open カフェ
11月		文部科学省で発表		軽運動 ボッチャ&卓球バレー
12月	障害者の生涯学習の推進フォーラム	フォーラムとフェスタで出店と発表	公開講座	Xmas cake づくり
1月				餅つき交流会
2月		からくりCafé		ダンス&ダンス
3月	啓発用リーフレットを関係機関に配布	Café 出店と生涯学習事業の周知		

②具体的な内容

【秋田県】

- ・障害者の生涯学習推進フォーラムを12月2日、秋田市文化会館で開催した。社会福祉関係者や県民ら約250名の参加を得ることができた。シンポジウムでは、県内で障害者の生涯学習に携わる施設や団体の4名による活動紹介の場を設けた。シンポジウムや、小説「あん」の作者、ドリアン助川氏の講演を通し、誰もが尊重し支え合う共生社会の在り方について考える場とすることができた。
- ・地域社会における視覚障害のある方々との共生や社会福祉について考えるとともに、点訳のスキルを学び、視覚障害のある方々を実践的に支援できるボランティアの育成講座8回を県生涯学習センターで実施した。
- ・県障害福祉課主催の「心いきいき芸術・文化祭」において、本事業の周知のため、事務局（生涯学習課）が会場で啓発用リーフレットを配布した。
- ・2月に行われた秋田県生涯学習・社会教育関係職員会議において、コーディネーターが本事業について説明した。
- ・3月末に啓発リーフレットを市町村教育委員と特別支援学校、相談支援事業所等、配布予定。2019年度初めには、市町村生涯学習・社会教育主管課長会議にて啓発リーフレットを配布し、本事業について説明し、各市町村での取組の推進を図る予定である。

【再委託先① 北秋田市】

H19年、支援センター開所当時から、障害理解を深めるために、地域住民に協力していただきながら様々な交流活動を展開してきた。この10年間で、自分たちは助けをもらうだけでなく、自分たちができることを地域に還元していかなければならないということに気づき、地域のイベントやボランティア活動に積極的に取り組むようになった。自分たちの取組に自信をもつことができるようになると、自分たちの夢を語るようになってきた。今回の生

涯学習事業はまさに、自分たちの夢を実現するための方策について模索していたタイミングで出会ったものである。Café 活動への取組を中心に、障害がある方もない方も安心して集える場所をつくらうと取り組んでいる。この経緯から、現在の取組をスライドにまとめ、Gちゃんサミット、生涯学習フォーラム、生涯学習フェスタで当事者の声を交えながら伝えることができた。

また、2月に実施した、ボランティア育成の目的も含めた研修会では、学生、当事者団体、実践している当事者などの声をパネルディスカッション形式で紹介することができた。その後は、参加してくださった方全員が自分を振り返りながらグループトークをし、本音を言い合える場となった。参加者は、民生委員、各福祉事業所、大学生、障害がある子の保護者、行政関係者など、約130名であった。研修会の流れは次のとおりである。

- 1 情報提供（文部科学省、秋田県教育庁、明治大学講師）
- 2 パネルディスカッション
- 3 ほっこりCaféタイム（グループワーク）

広報期間が短かったため、この研修会の開催について知らなかった、参加しなかったという声が多数聞かれたことと、平日開催のため、高校生や働いている保護者が参加できなかったという課題が残った。また、年配の方にとってグループワークは取り組みにくいところがあるため、もっと話しやすい雰囲気を作ることが必要であることも課題として挙げられた。内容が多すぎたため、文部科学省や県の情報提供に係る時間をもっと取ってほしかったとの意見も聞かれ、内容の検討も図る必要がある。

良かった点として、

- ① コーヒーを飲みながら、終始和やかな雰囲気、肩を張らず参加出来た。
- ② グラフィック・レコーディングで視覚的にも研修内容を理解することができた。
- ③ 初めて会う人とも話をして、周囲とつながる事が出来た。
- ④ 自分も参加したい、関わりたいと思っている人がたくさんいるが、情報が行き届いていないことが分かった。

などが参加者の声として挙げられた。

この研修会は、障害理解だけでなく、相互理解の場として毎年継続して取り組むことで、共通理解につながると考えられるため、その時に合った形で展開させていきたい。

【再委託先② 能代市】

LD教育の第一人者と言われている東京学芸大学 名誉教授の上野一彦氏による「新しい障がいへの理解とこれからの共生社会を考える」と題した講演会は、とても分かり易い内容であった。最新のLD教育に係る情報提供に加え、障害者・健常者が相互扶助の精神で生活する心のゆとりと理解を深めることが大切であること、共生社会に向けて更なる理解をする必要性と行動力が求められていることが強いメッセージとして伝えられた。

【再委託先③ 潟上市】

～今後の検討すべき課題～

- ・今後、市主催のイベントにも積極的に参加するための方策について考える必要がある。
- ・社会福祉協議会のイベントにも積極的に参加していきたい。
- ・他市町村のイベントにも参加していきたい。

～検討事項～

- ・参加者募集の周知を今後、どのように広げていくかが課題である。
- ・各部署(市・公民館・社協・育成会・支援学校など)の連携と役割分担の周知。
- ・要望や相談を各部署に向けて行いながら、皆で本事業を行っていく方策を探り、「理解と協力」を求めているよう、ゆっくり広げてゆくイメージで「WIN-WIN」につなげていきたいと考えている。また、成果については、様々な場面を捉え、発信していきたい。

【参考：参加者実績】

(A) 参加者の属性について

	合計(人)	男性(人)	女性(人)
属性別参加者数	231	110	121
(内訳)			
行政関係者(教育委員会)	18	10	8
行政関係者(首長部局)	0	0	0
学校教育関係者(大学等関係者を除く)	38	28	10
大学等関係者	4	1	3
公民館等社会教育施設関係者	12	11	1
社会福祉法人関係者	18	11	7
NPO法人関係者	6	5	1
企業関係者(商工会等含む)	2	1	1
保護者団体関係者(親の会・手をつなぐ育成会等含む)	41	10	31
その他一般参加者	74	24	50
運営事務局関係者	18	9	9

※県教委主催 フォーラムを除く

(B) メディアインパクト(報道等での周知状況)

	件数
新聞(雑誌)	11
ラジオ	0
テレビ	1

※該当がある場合、別途参考となる資料を添付のこと。

7. 本実践研究事業の実施により得られた成果・効果

(事業の実施により直接的に得た成果／アウトプット)

※数値を用いる等して具体的に記載すること

- ・フォーラム等でパイロット事業先の取組について発表し、各市町村の学習プログラムの質の向上と連携体制の充実を図った。
- ・県内80箇所の相談支援事業所に配付するリーフレットを相談事業に活用してもらうことで、障害者やその保護者に、本事業の取組に係る情報提供ができるようにする。
- ・各地区の社会教育・生涯学習担当者が、障害者の生涯学習を推進していけるように、社会福祉法人や社会福祉協議会に登録しているボランティア等の活用について情報提供した。再委託先には、地域の高等学校と連携し、高校生ボランティアの活用も可能である旨、今後も情報提供するとともに、本事業を、障害者と接する実践の場として高校生に提供できるようにする。
- ・北秋田市障害者生活支援センターささえでは、22回の講座に対して541名の参加、能代市中央公民館では9回の講座に対して129名の参加、潟上天王つくし苑では5回の講座に対して198名の参加があった。講座内容によって参加者数に偏りがあるが、さらに本事業を周知し、参加者の増加が見込めるよう、今後も関係機関に働き掛けていく。

(事業の実施により終了後（中長期的）に得たい成果／アウトカム目標)

※数値を用いる等して具体的に記載すること

- ・平成29年1月に実施した実態調査では、障害者が参加可能な講座を実施している市町村52%、障害者を対象とした講座を実施している市町村12%であった。本事業をとおして、「障害者の生涯学習」に関する理解啓発を行い、障害者が参加できる生涯学習講座の実施100%を目指す。
- ・事業終了後の持続的な取組体制の構築に向けて、生涯学習センターのシンクタンクとしての役割が機能し、市町村の相談に応じたり、助言を行ったりするなど継続的な取組を行えるようにする。
- ・地域の自立支援協議会と再委託先の連絡会議の委員がほぼ同じであることから、自立支援協議会で「障害者の生涯学習」について話題提供をさせてもらい、一人一人の障害者の途切れのないサービス提供が行われるようにしたい。学校で作成した「個別の教育支援計画」と相談支援事業所が作成した「障害福祉サービス利用計画」が継続して障害者に提供できるようにし、障害者の地域での学びを支援できる体制を整えたい。
- ・平成30年度度の学校目標の重点に「交流及び共同学習を中心とした特別支援教育、生涯学習の推進」を掲げた特別支援学校があった。もともと特別支援学校では、地域と共にある学校経営がされており、地域で学ぶ基盤ができています。再委託先の地域には、5校の特別支援学校が協力することになっている。これまで障害者は学校卒業後に学びが途切れていたが、本事業の推進をとおして、県内の特別支援学校15校に活動が広がり、特別支援教育の生涯学習化が期待できる。